

REPORT

第1日目 レポート (7/19)

開会式

7月19日 9:30 ~ 10:00 / コンベンションホール



ICAC KOBE は、阪神・淡路大震災から 15 年目の 2009 年より隔年で開催され、2015 年は震災から 20 年目の大きな節目となりますので、昨年 7 月に開催された第 3 回大会に引き続いての開催となりました。初心を忘れないために、毎回、開会式では阪神・淡路大震災当時の様子を編集した動画を上映し、震災の犠牲になった多くの人と動物に黙祷を捧げてきましたが、震災後、兵庫県の動物愛護センター建設にご尽力下さり、昨年不慮の事故によって急逝された貝原俊民前知事と、この会議の準備中の 5 月に急逝された共催団体・近畿地区連合獣医師会の松林驍之介前会長のご冥福を共に祈りさせていただきました。



神戸市保健福祉局健康部生活衛生課長 丸尾登氏



兵庫県動物愛護センター所長 河野寛昭氏

はじめに、実行委員会を代表して、神戸市保健福祉局健康部生活衛生課長の丸尾登氏より人と動物の関わりに於ける持続的発展、そして人と動物の幸せな未来に対する願いが語られ、次に、兵庫県動物愛護センター所長の河野寛昭氏からは、上映されたビデオを見ながら脳裏に去来した当時の話を交えつつ、人との繋がりや出会いの大切さ、そして国をあげての社会づくりの重要性が語られました。

引き続き、共催団体の近畿地区連合獣医師会を代表して、松林前会長の遺志を引き継ぎ、新たに会長に就任された佐伯潤氏よりご挨拶を頂きました。災害時のみならず、人と動物の両方に関わっている獣医師という立場の責任の重さと、ここに集まった同じ思いを持った皆様に感謝の意が伝えられました。



近畿地区連合獣医師会会長 佐伯潤氏

その後、司会者の公益社団法人 Knots 理事長の富永佳子氏から、ご支援を頂いている皆様の紹介と、会議全体の構成段階からアドバイスを下さった会議アドバイザーのヒト医療識者・竹内勤氏、理学系識者・松沢哲郎氏、文系識者・奥野卓司氏が紹介され、ICAC KOBE 2015 阪神・淡路大震災 20 年記念大会 - One World, One Life が開幕しました。

基調シンポジウム

「阪神・淡路大震災の経験を人と動物の幸せな未来へ
— 護るべき大切な日常とは? —」

7月19日 10:30 ~ 13:00 / コンベンションホール



座長 京都大学 名誉教授 位田 隆一氏

開会式に引き続き、この会議全体のベースとなる基調シンポジウムが開催されました。私たちの守るべき大切な日常とは何か、「生き物としてのヒト」から考えるということテーマにして、濃密な議論が繰り広げられました。

小原氏の発表では、「We (私たち)」という隣人としての考え方の枠組みを変えていくことで、この国際会議のテーマでもある「全ての生き物」に対する人間の接し方が変わるという概念を、これまでの人間の歴史の実例を挙げながら分かりやすく提示して下さいました。例えば、アメリカの法律によって認められた同姓婚に対する社会的な考え方などは、時代によって「パブリック (We)」の境界線を変化させることが可能であるということが具体的に示された事例といえます。こうしたパブリックの境界を変化させていくことで、人間中心、隣人中心の「We」の概念を変化させ、この会議のテーマでもある「全ての生き物のケアを考える」という壮大なテーマについての可能性を示唆されました。



同志社大学 神学部 教授 小原克博氏



長崎大学大学院 医歯薬学総合研究科 教授 篠原一之氏

次に、「家族愛の脳科学」と題された篠原氏の発表では、人間にとっての「報酬=愛」を、家族の笑顔を見ることによってもたらされる脳内の前頭前野 (PFC) の反応によって調査するという、非常に興味深い研究内容が報告されました。

情動的・直感的な傾向が強いとされる母親の脳と、理論的傾向が強い父親の脳内の反応が示され、実際には母親的な脳を持つ父親やその逆が生物には多様に存在するのです。そうした多様性こそが、さまざまな状況や環境に適応しつつ次の新しいジェネレーションを生み出してゆく生物の可能性でもあるのです。

また、生殖能力が無くなった後にも他の生物では考えられないような長生きをする人類には、孫に対して母親と父親の脳の両方をバランスよく備え持つ祖母仮説という特殊な愛情の受容形態があり、母親や父親との関係だけではな



親く、祖母と孫という長寿命の人類ならではの関係性が子孫繁栄に寄与しているのではないかという仮設も興味深い報告でした。



宮城大学 食産業学部
教授 森本素子氏

森本氏の発表では、人間を構成する 60 兆個という細胞のひとつひとつが、変化に対応するということを前提とした構造を持っており、わずか 4 日で入れ替わる小腸の絨毛をはじめとして、私たちの身体は変化を受容しながら日々新しく生まれ変わっている姿が紹介されました。

こうした生物としての柔軟性を東日本大震災での自らの被災経験に重ねあわせ、変化を受け入れながら互いに補完する社会、そしてそれまで考えもしなかった新しい経路での自己を形成し、外からの圧力をテコにして生き残っていくとする生命の力強さが語られました。

いずれの発表も、それぞれの観点から「変化に対応する」ことの重要性が語られていたように思います。この基調シンポジウムのはじめに、座長の位田氏によって語られた、「元に戻すという『復興』という観点から、新しい自分、新しい社会の始まりという観点への変換」が重要であり、人と動物と自然のバランスを保ちつつ生きるという言葉が、今の時代を生きる私たちの未来を象徴しているように感じました。



ポスターセッション

7月19日・20日 / 1F エントランス・ホール



ICAC KOBE 2015 の会場となる神戸大学総合研究拠点、学際研究推進体制を人文・社会学系を含めた全学規模に拡げ、大学の研究成果を集積することを目的に設置された施設で。この会議では、メインホールの他にラウンジ、セミナー室を使用して、同時に3ヶ所でシンポジウムとセッションが開催されました。

また、1階のエントランスはコミュニケーションルームとして開放され、シンポジウムや各セッションの合間の時間などに多くの来場者が訪れる場所となりました。国内外から参加した 14 組のポスターセッションが開催され、来場者との

積極的な交流の場となりました。審査員となる事務局アドバイザーが発表者から説明を受けたりしながら審査を行い、翌日の閉会式でアワードが発表されることになっています。

シンポジウム 1

「同行避難～これからの人と動物の緊急災害時」

7月19日 14:30～17:30 / コンベンションホール



杉原未規夫氏



寺井克哉氏



遠山 潤氏



大西 一嘉氏



山口千津子氏

阪神・淡路大震災で大きな課題となった動物との同行避難ですが、その後の中越大震災、東日本大震災などの災害を例に、兵庫県、新潟県、静岡県等の行政の担当者と、都市の安全計画の専門家、そして、災害時に現場で救助・復興のアドバイスを行なった専門家によって集中的に議論が行なわれました。

複数の災害事例を持ち寄り、多角的に議論を行なう機会はそれほど多くありません。これらの発表の中から垣間見えるのは、災害が発生した地域によって対応や必要とされている支援の内容が違うということです。

兵庫県動物愛護センターの杉原氏からは、阪神・淡路大震災当時のスライドを紹介しつつ、どのような被害の中で動物の救護活動が行われたのかが報告されました。当時集まった義援金の残金は、緊急災害時動物救護本部へと引き継がれ、今後の国内での災害時の動物救護初期経費として活用されることになりました。活動を通して実際に経験した、初動時の経費不足に苦慮したことが今後に活かされた事例です。

静岡県健康福祉部の動物愛護班・寺井氏は、東日本大震災での経験を踏まえ、「動物愛護」「被災者の心のケア」「人への危害防止」の観点から同行避難の必要性を示されました。同時に多くの人が被害に遭う災害では、基本的には避難所での飼育管理は飼い主の責任となりますが、飼い主そのものが被害を受けている中で、如何にその責任を全うしてもらえる仕組みを地域の中で作っていくのかが、今後の行政の大きな課題となっています。